

「ならぬは人のなさぬなりけり」

VIN 第5号をお届けする。

「持続は力」、しかし持続するのに結構、努力や忍耐が必要なこと。そして小さく見える積み重ねこそが「力」となることはこの小誌を発行する中でさえも少し見えてきた気がする。

7月にイタリアのラクイラで開催されたサミットは見掛けは必ずしも成功とは見えないが、何をどのようにするべきかは、各国ともに漸く判って来たのではないかと思う。多くの国の利害を辛抱強く調整し続けやがてはゴールに達すること。そこにしか答えはないのだと言うこと。そのための努力を惜しまず、継続して行くしかないこと。G8、G8+新興5カ国（中国、インド、ブラジル、メキシコ、南アフリカ）、更にそれに韓国、豪州、インドネシアが加わり2050年までに温室効果ガスの相当量を削減する取り組みの枠組みグループの主要経済国フォーラム（MEF）、更にアルゼンチン、トルコ、サウジアラビアを加えたG20、アフリカ諸国との連携に取り組むG8+アフリカ諸国など国際会議は次々に拡大して来ている。今や、多くの国々の合意が不可欠なことの証でもあると思う。何よりもリーダーシップをとっているG8諸国の辛抱と継続取り組みが試されている。そして独断ではなく合意による本格取り組みがより速い達成と効果を約束してくれることを示し始めている。世界的な異常気象の頻発は危惧されている地球規模での温暖化の危機的な状況への黄信号を点滅させ始めていることに他ならない。

全くの歴史的皮肉かもしれないが、未曾有の世界的な経済危機が各国政府を環境対応の政策により駆り立て、「グリーン・ニューディール」など環境テーマが数少ない政策の一つになり得ることで、人々の関心と呼び、インセンティブの高さも手伝ってたかも知れないが、環境対応車への関心も高く、環境対応車購入希望者は増え続け今や、数ヶ月待ちの状況だと言う。また、日本での太陽光発電も政府の後押しもあり、管ての、勢いを取り戻しつつあるようだ。「やれることからやり始める」。それも答えのひとつに違いない。先行する国々がまず模範を示すことも、新たな道を開く良い動機付けとなると思う。「持続は力」そして“CHANGE! YES, WE CAN”だ。

文化の欄は、「爪（ネイル）」が主役、と言っても爪そのものではなく爪を飾るネイルカラーにスポットを当てた。「爪に色を塗ること」の歴史は古く、多様で中々奥が深い。大量のネイルカラー用の小型ガラス容器を提供している当社にとっても興味をそそられるテーマである。取材にあたり、ご協力いただいた皆様に感謝したい。

世界のセレブへのインタビューはエジプト、フィンランド、アメリカの三ヵ国の若い女性達へのインタビューとなった。「素肌美人」揃いで、「香水好き」が共通していて、それでもなお自分の美しさを大切にしている素敵なセレブの卵達であった。

環境についてのテーマは「水」に続きパリ、ニューヨーク、東京の三大都市の「環境」取り組みの紹介である。それぞれの都市事情が見えてきて、比較としてではなく、三都市の今日と明日、そして人々の意気込みが感じられて、興味深い内容となった。特にニューヨークでは地下鉄のクリーン化を都市の改善にまで繋げた管ての市長の勇断は今なお語り草となっている。市民レベルでの今回の勇気ある、取り組みの成功も祈りたい。同じ問題を抱える都市の模範となり得ると思う。

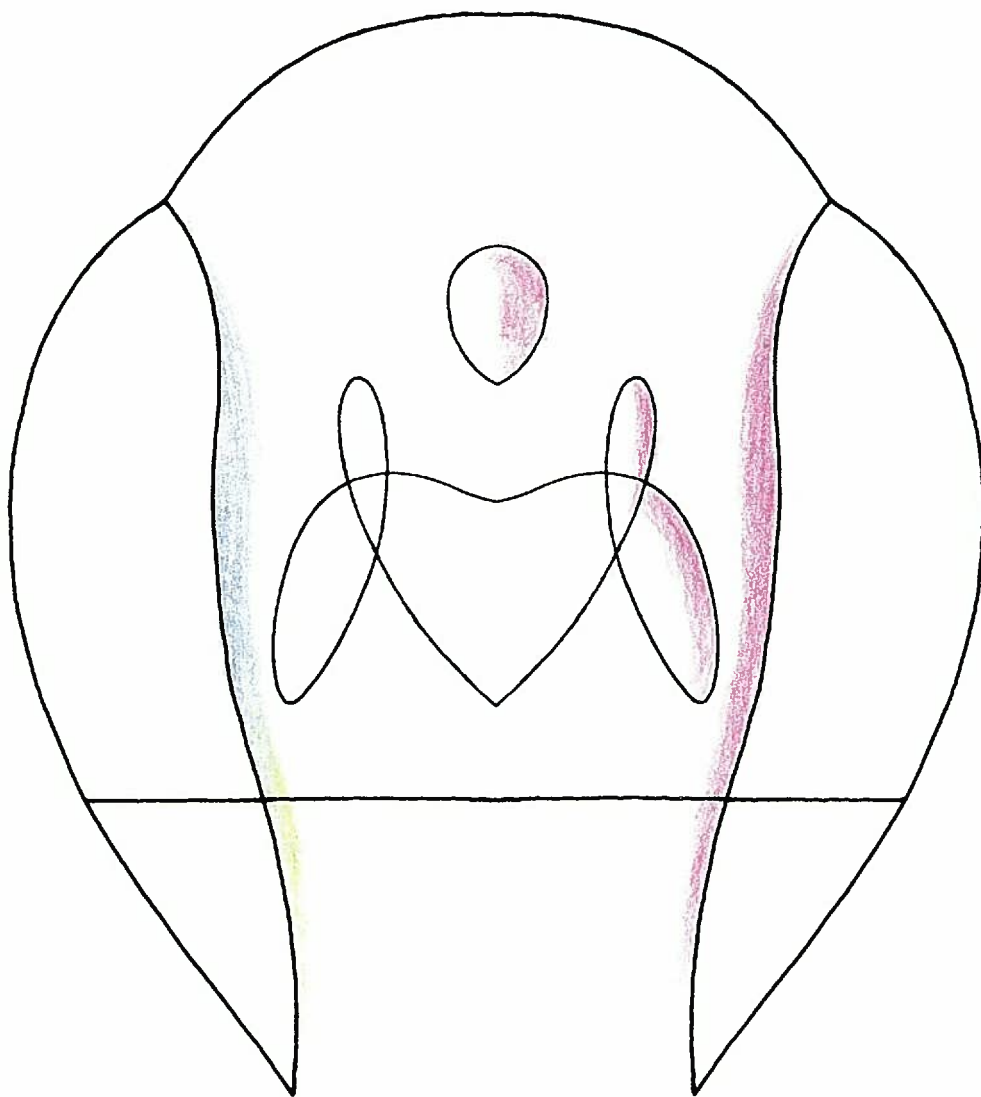
表紙では自らもアフロディティ（美の神）であった「女王クレオパトラ七世」を通して「大人の香り」をヴィーナスに捧げた。

興亜硝子株式会社

代表取締役 出井龍彦

2009年 秋

何度も生き還る地球の恵み、ガラス。



「人は誰でも、鏡に正面の顔を見ているが、他人には横顔を見られていることが多いものです。三面鏡はいちばん身近な『他者の目』として、女性の身だしなみを見守ってきましたが、その存在は消えようとしています。三面鏡の復活。それは新しい時代に求められる機能を備えた鏡によって、初めて『他者の目』はなくなるでしょう。」

「キフィ」
それはクレオパトラの香り
「ギリシャ」と「エジプト」二つの文明の出会いと融合
渦巻く歴史の潮流の申し子

「波の荒い海の中、エジプトのすぐ前にあり
人々はファロス島と呼ぶ」
ホメロスの「オデッセイア」に謳われた島
そして、その身を懐に抱く町、「アレキサンドリア」
ホメロスの叙事詩を愛してやまなかった
ギリシャ・マケドニアの大王「アレクサンドロス」
その大王が築き、大王の名を冠した都
マケドニアの武将プトレマイオス家は遺志を継ぎ
エジプトの王「ファラオ」として君臨する

三百年の「時の移ろい」が
ヘレニズムの爛熟と結びを生む、
スミレ、ダマスクローズ、サフランの香りを愛した
プトレマイオス家の最後にして華麗な「女王」は
ローマの武将「アントニウス」への
恋の冒険の航海に身を委ねる

黄金の艦、銀の権、緋色の帆
箏笛、竖琴、フルートの音に合わせ
小アジア・タルソスのキュドス川を
「美の神」に扮した「女王」の船が逆行する
さまざまな薫香のふくむとした香りが
川の兩岸の人々を魅了し

「ディオニソス神」のアントニウスのところにやって来た
「美の神」を見ようと人々を走らせる
そして、ローマの武将とヘレニズムの女王の睦

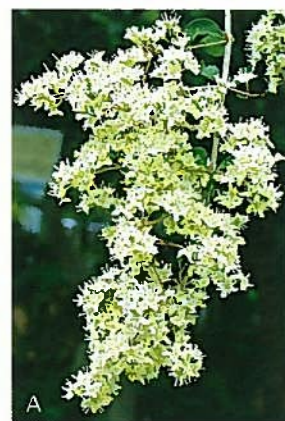
その女王の名は「クレオパトラ七世」
「アレキサンドロス」大王と同じ
ギリシャの血を受け継ぎ
「ファラオ」にして「美の神」

ムセイオンで培われた美の力はワイン・乳香・没薬に
クレオパトラの好みの香りを記した
稀有な香り「キフィ」を生み
口マンスを包む
大人の恋 大人の香

ネイル — なにより身近で愛らしいキャンバス。

こだわりのガラスびんから生みだされる豊かなネイルアートの世界。

日本では美人を形容する表現は数多く、朱唇皓齒、雪膚花貌、花顏柳腰、蛾眉曼睩などと言われてきた。いずれの語にも彩色が溢れ、艶っぽく感じられる。古来、女性は3つの白いもの(肌、歯、手)と、3つの赤いもの(唇、頬、爪)、3つの黒いもの(目、眉、睫毛)を持ち、それらは美の規範になるとされ、女性たちは、この「色」を希求し続けてきた。美白美容、口紅・頬紅、眉黒・マスカラなど「色彩」を見せる化粧品や美容術は、5,000年前から続いている。



A. 爪を着色する歴史も、なんと紀元前3,000年のこの古代エジプト時代までさかのぼる。貴族は手足の爪をきれいに磨いて、赤橙色の「ヘナ(指甲花)」を塗っていた。階級の高い人は濃い紅色が塗られ、低い人ほど薄い紅色が塗られていたようだ。

日本では江戸時代には紅花(古名は「末摘花」)で爪を染めることも元禄期にすでに行われていた。紅花から採れる紅の色素(カルタミン)は生花の0.3%と少なく、江戸時代には「紅一匁、金一匁」と言われるほど高価なものであった。唇の紅引き化粧と同じように、女性は爪にもポイントメイクとして、紅を愛用した。

爪を着色する歴史も、なんと紀元前3,000年のこの古代エジプト時代までさかのぼる。貴族は手足の爪をきれいに磨いて、赤橙色の「ヘナ(指甲花)」を塗っていた。階級の高い人は濃い紅色が塗られ、低い人ほど薄い紅色が塗られていたようだ。

日本では江戸時代には紅花(古名は「末摘花」)で爪を染めることも元禄期にすでに行われていた。紅花から採れる紅の色素(カルタミン)は生花の0.3%と少なく、江戸時代には「紅一匁、金一匁」と言われるほど高価なものであった。唇の紅引き化粧と同じように、女性は爪にもポイントメイクとして、紅を愛用した。



B. 許六

爪紅の指でつまむや 嘉定菓子

紅はごく一部の裕福な人々しか使用できず、紅花を摘む農家の娘たちとは無縁なものであった。

行く末は 誰が肌ふれむ 紅の花 芭蕉

古きに渡り人類は、天然素材である鉱物、植物や動物から色素を抽出し染料を作り出し、その染料で絵を描き、衣料を染め、化粧にも使った。20世紀に入ってから、急速に合成化学が発達し、様々な色調の塗料を生み出せるようになった。現代のようなネイルカラーが誕生したのは1920年代のアメリカ。自動車用の塗料として使われていたラッカーが耐久性・速乾性に優れていたため、ネイルカラーとして応用された。それはネイルアートへと発展し、見だしなみの一つとして生活に浸透していった。

日本にもその流行は瞬く間に広がり、現在では日本の美術術は世界のトップクラスとなった。「マニキュアリスト」(日本ではネイリストと呼ばれている)という職業が生まれ、日本のネイルサロンの店舗数は8,000店に達し、市場規模は2,000億円とまで言われている。人間が自分の肉体を素材として楽しむ芸術的行為、これは人間だけの特性ではないだろうか。身体への装いは常に社会の反映であり、今日の女性美もまた、世界の現状の証言である。



ネイルカラーの普及に、透明性の高いガラス容器がはたしている役割は大きい。ガラスは化学的安定性と気密性に優れている材料であるので、ネイルカラーのような活性な液体でも、なんら内容物を変質させることなく、色とりどりのネイルカラーを手元におけるようになった。私達はガラスびんづくりにおいて、透明へのこだわりを優先課題として取り組んでいる。透明であることが当たり前前のガラスびんは原料や溶解条件によって色調が変化してしまうのである。特に化粧びんの美観三大要素は「肌・色・肉廻り」である。内容物を確実に保護するために、美しいガラスびんを提供していきたい。



C. ネイル・アート



D. ネイル・アート

- A. ヘナ(指甲花)
- B. 石川豊信画(1764年)風俗絵本「江戸紫」
- C. ネイル・エナメル
- D. ネイル・アート

- 1. 『化粧文化(No.2)』ポーラ文化研究所(1980年5月)
- 2. 『美女の歴史』(1999年4月)ドミニク・バケ著 石井美樹子監修
- 3. 『ふでこ(vol.18)』白鳳堂(2009年3月)
- 4. 『クレオパトラ』訳者 北野 徹 白水社
- 5. 『フルタルコス英雄伝』編者 村川堅太郎 筑摩書房
- 6. 『ホメロス オデュッセイア』訳者 松平千秋 岩波書店

参考文献

三面鏡ひと模様 素肌美人へのプレゼントは、香水をどうぞ。

素肌が一番きれいなのは日本人だといわれているが、他国にもきめ細かい素敵な肌を持つ「素肌美人」がいる。彼女たちは、不思議なことに全員、香水を愛好していた。

最初はエジプト・カイロの女性。20歳。

大学の日本語学科在籍の三年生。世界一といわれている大渋滞の中、ようやく着いた自宅のマンション。家族は両親と五人。部屋の窓を開けると、すぐそこにギザ・ピラミッド。世界遺産が毎日見られるのだ。



典型的なエジプト美人。肩がたく、眼が輝き、髪は長い。肌は少し浅黒いがしっとりしている。乾燥しているカイロではめずらしい。肌のきれいなことをほめると、朝クレンジングで洗顔

するだけで、化粧水も乳液、クリームはつけないという。夜もクレンジングで洗顔するだけ。この化粧法で綺麗な肌が保たれているとは思議だが、肌にトラブルはないと言い切る。エジプト人はこのような化粧法が多いらしい。ただし、外出する時にはファンデーションを使い、アイライン、アイシャドー、マスカラなどのメイクアップをする。ポイントはアイメイクだという。もともと化粧には関心があって、特に香水は大好き。鏡前に並んでいる香水びんを数えてもらったら11種類もある。エジプト人は香水が好きなのだ。

二人目はフィンランド・ヘルシンキの女性。20歳。

中心から少し離れた住宅街の一軒家。家族は父母と三人。朝からりんごパイを作って待っていてくれた。フィンランドの家庭は庭に必ずりんごの木がある。彼女の部屋は二階。

窓辺にはBlock Lamp、フィンランド生まれのデザイナー、Harri Koskinenの作品で、ニューヨーク近代美術館MoMAのデザイン・コレクションに収められているものと同じものが置かれている。フィンランド製で人気のMarimekkoのクッションがソファの上に置かれ、花瓶はドイツ製の陶器。部屋全体がさすか北吹というセンスにあふれている。彼女もシルクのような肌をしている。小さいときニキビが多かったので、朝晩の洗顔とクリームは



欠かすことがない。そして一週間に一回、日曜日にはメイクをしないで肌を休めることにしているという。若い今から注意しているのだ。化粧も香水も「人前に出る礼儀」と答える。だが、香水は自分で買ったことはない。全部、家族やボーイフレンドからのクリスマスプレゼント。開けて見せてくれた香水ボックスにたくさん入っている。フィンランドでは多くの場合、化粧はトイレの中。トイレの中に鏡があって、その鏡の前に小さな化粧品とか装飾物を置くスペースがある。不便な感じはするが、これがフィンランドの通常のスタイル。生活習慣の中に組み入れられているのだから問題ないだろう。

三人目はアメリカ・サンフランシスコの女性。19歳。

高校を卒業し、ヨーロッパの音楽大学を目指している。高級住宅街にある家は1920年建築。家の中はアンティーク家具で埋まっている。弁護士の父はフランス人で、母はアメリカ人。一人娘。さて、彼女の顔を見るとききれいに化粧している。化粧のステップを聞くと、洗顔料で週三回程度洗うだけという答え。不審な顔を見ると、普段は水で洗うだけで、洗った後に何もつけないという。つまり、今日は化粧したので洗顔

料を使用して洗ったということである。そしてスキンケア製品は何も使わないとのことである。それなのにきれいにファンデーションを塗ったように見える。驚き、再確認するよう

に訊ねると、母も同じで何もなくてもよい肌だという。今はメイクアップしていないが、外出する時はする。自分専用の化粧箱をもってきて見せてくれるが、中は全部フランス製のメイクアップ製品だけである。化粧は遊び心だと思っているし、変身するのは楽しい。特に男性と会うときに化粧するが、人から見られるためではなく、自分をリラックスさせるためにする。ただし、香水は家の中でも外出時でも、いつでもつけている。匂いは人間の身だしなみの一部だと思っている。その香水もフランスで買うか、自分の好みを知っている父やボーイフレンドからのプレゼントだ。肌のきれいな女性は香水が大好きなかと、改めて思う。



トピックス 「紅花」—— 染められて永遠に咲く「紅の花」

紅花はキク科の一年草で、原産地はエジプト・ナイル川流域であり、種子や栽培法がシルクロードを通り、朝鮮半島を経て、推古天皇の時代(593~629年)に日本に渡ったといわれている。江戸時代、出羽の紅花は「最上紅花」と呼ばれ、品質の良いものがとれ、享保時代(1716~1735年)以降全盛期を迎えた。7月上旬に鮮黄色の可憐な花弁をつけた紅花は直ぐに摘み取られ、紅餅へと加工される。紅餅は酒田港に集荷されて、北前船で敦賀港に荷揚げされ、琵琶湖上を縦断して、京都へ送られた。京都の紅屋の手によって、紅餅から真っ赤な紅が作られ、それが京女の唇、爪を染めるとともに、紅色の美しい衣装を染めあげた。明治に入ると、外国産の化学染料に押され、紅花は衰退し、やがて姿を消した。しかし、宮中の式典で用いられる服装はいつも山形県産の紅花で染められ、紅花はひそかに生き続けてきた。1993年6月9日、皇太子さまの婚礼の儀の時、束帯姿になった殿下が着衣した赤橙色の袍は伝統の紅花で染色されていた。江戸時代の「諸国産物見立相撲」の図説には、東に「出羽の最上紅花」、西に「阿波の藍玉」とあり、日本で紅と藍の二つの染色文化をつくっていたのである。



紅花



紅花染めのハンカチーフ

大都市という「生きもの」。 パリ、NY、東京、環境三都物語。

大都市は都市性格で環境対策が異なる。パリとニューヨークと東京も、それぞれ異なる都市性格を要しており、当然に異なる環境対策を進めている事例を紹介する。

パリには工場がない

パリ市役所を訪問し環境対策についてお聞きすると、開口一番「パリには工場がない」という発言。これがパリの特徴であり決め手。工場が存在しない首都は世界にないだろう。パリの人口は200万人。だが、ビジネス関係と観光客で年間8,000万人が訪れ、毎日1,000万人がパリに滞留している。市民の5倍である。シャルル・ド・ゴール空港を利用する客数が、世界の経済・紛争



問題などで、直ちに変化するので、平均したCO₂計測が難しいという特徴はあるが対策は進めている。一番の対策は暖房である。窓を二重にして暖房時間を少なくすることと、原子力発電など

で2050年にはガスを完全に止める予定にしている。また、自動車対策は、メトロ、バスとトラム(市電)と自転車の活用で、なるべく車でパリに入らせないようにすること。自転車は効果が上がっている。トラムは2007年に導入し、現在8km区間だが、いずれは市内循環の36kmとする。ごみ対策も大事で、分別処理を推進している。さらに重視しているのは植栽。2001年から2008年にかけて、緑地を32ha増やし、街路樹は5,000本増やし10万本とした。特に自慢はモンパルナス駅構内上につくった3.5haの緑地公園である。最近、空気がきれいでないと発生しないキノコが、パリの二つの肺といわれているブローニュとヴァンセンヌの森で発見されたが、これがCO₂削減対策の効果と評価している。空気をきれいにすることは、観光客への最大のプレゼントだろう。

ニューヨーク・スラム街の環境改善

ニューヨーク・イーストリバーを渡ったSOUTH BRONXはスラム街である。住民数は11,000人。失業者は全米平均が9%の失業率に対し、27%の高失業率。ここに

「持続可能な南ブロンクス」(SSBx)という環境改善グループがある。もともと1800年代に、オランダ人が開発した農場と住宅地だった。ある火事を境に放火が次々と発生。嫌気がさした住民が出て行き、荒れた地区となってしまった。道路を大型トラックが絶え間なく通って、そのたびに揺れる。一日に16,000台、朝昼夜関係なく通過し、夜の方が多。理由はHunts生鮮市場に出入りするためである。結果として四人に一人が喘息で、学習障害、集中力減退、奇形児発生率が高い。住民が個人的解決を図ろうとすれば簡単である。この地区



から出て行けばいいのだ。しかし、それではマンハッタンのハーレムと同じ解決法だ。この地区に住んでいる人々の生活を向上させるための環境解決をしたい。これがSSBxの最大目標だ。そのためのメインの仕事は、ニューヨーク市との交渉である。今までのすぐれた都市計画といわれるものは、そこに住んでいる住民を無視してつくったものが多い。そうではなく、この地区を大事にする都市計画が必要だ。SSBxのスローガンは「I GREENED THE GHETTO」(ゲッターをグリーン化する)。数年後のSOUTH BRONXを期待する。

東京・丸の内再開発

東京駅前に広がる丸の内地区は、現在、第3次開発(1995～現在)が、地権者、行政、民間企業などによって設立された協議会によって進められている。開発地区は面積約120haと約100棟の建物、床面積690ha、就業人口約24万人、企業数約4,000社、総売上高約120兆円(日本GDPの2.4%)、東京駅利用者約93万人/日(20路線・13駅)という大規模地区である。協議会では「再開発ガイドライン」をつくり、地区全体と



して街並みやビルに共通性や一体性を持たせて、圧迫感を与えないなど人にやさしい街づくりを進めている。また、旧三菱1号館など歴史あるビルの復元事業にも積極的だ。丸の内再開発で特筆したいことが二つある。一つは東京湾から皇居に抜ける風の道だ。八重洲口の高層商業ビルを取り壊し、その容積を両側の超高層に移転し、海風が低層の駅舎の上を抜けて皇居へ流れ込み、皇居の緑によって冷やされた空気が周囲に染み出していくもの。ヒートアイランド現象の改善である。もうひとつは、東京駅の復元である。明治41年に着工され、大正3年に竣工したものが、東京大空襲で破損したため、3階部分を削り取って、2階建てとして応急処置をしたまま使い続けてきたが、それを復元し、原設計の通り赤煉瓦駅舎にする。さらに、駅前の現在道路になっているスペースを広場とし、ここから皇居に向かう行幸通りを、緑豊かな直線の歩道にする。

新任外国特命全権大使が、信任状を天皇陛下に捧呈する儀式に臨むために儀装馬車で走る姿は、まさに伝統文化に基づく日本を示す景観であり、素晴らしい都市景観美として世界に認識されるであろう。(CGは検討中の案)



興亞硝子株式会社

本社 〒132-0035 東京都江戸川区平井1丁目25番27号
営業本部(直通電話)
大船工場 〒251-0013 神奈川県藤沢市小坪23番
市川工場 〒272-0126 千葉県市川市千鳥町2番
大阪営業所 〒541-0041 大阪府中央区北浜3丁目1番14号
カラ錠原橋ビル3階
上海高登玻璃有限公司 〒201804 中国上海市嘉定区马陆镇安翔路88号

<http://www.koaglass.co.jp/>

TEL.03(3684)1211(代)
TEL.03(3684)2705(代)
TEL.0466(23)5421(代)
TEL.047(397)4101(代)
TEL.06(6229)1619(代)

今回「VIN」発刊に当たり多くの方々にご協力を頂きました。

取材協力：ポーク文化研究所
<http://www.po-holdings.co.jp/csr/culture/bunken/>
日本新薬(株) 山科植物資料館
<http://www.nippon-shinyaku.co.jp/herb/index.html>
河北町紅花資料館
<http://www.town.kahoku.yamagata.jp/beni/>

TEL.021(5915)6665(代)